

吉野博吉氏とヒメハナシノブ

札幌市 丹 征 昭

インターネットでホームページを公開してから、早いもので10年が過ぎた。始めたころは日本語の園芸サイトの数は実に少なかったので、趣味の園芸家のサイトや、園芸雑誌のサイトが頼まなくてもリンクを張ってくれた。そのおかげで年毎にアクセスが増え、それにつれて、いろいろな問い合わせや質問メールも増えて、「ホームセンターで買った原種シクラメンの球根の上下が判らなくて困っている」とか、ときには「キクザキイチゲが一度咲いただけで急に枯れてしまった。根は元気なようですが、どうしてでしょうか」などという質問が舞い込んだりする。こちらから詳しい状態を訊ねてみると、キクザキイチゲについての質問者は、この植物が秋まで次々に咲いてくれると思い込んでいたことが判ったりする。

近年はホームセンターなどでも山野草が売られるようになり、山草栽培と一般園芸の境界がなくなる一方で、買っては見ただけのもの、どう扱ったらよいのかと思案する人も多らしい。初心者からの質問は、かつて自分が辿ってきた道を思い起こし、楽しみつつ返信させてもらっているが、戸惑うのは近年普及してきた外来山野草に勝手な和名がつけられているケースで、何々テンナンショウとか、何々サクラソウという呼び方であれば属までは推定できるが、「ヒナマツリソウ」とか「チドリアシソウ」とか

言われた場合、こちらとしては植物の正体を推察するのは不可能で、的確なアドバイスができないことが多々ある。

これとは違って、ある程度の知識を持つ生産者、業者が混乱の元凶を作り出しているケースもある。

2年前に、ヒメハナシノブとキョクチハナシノブはシノニムでしょうかと、質問を受けたことがあった。アルムの通販リストでは、ヒメハナシノブ（北千島産・*Polemonium humile* シノニム *P. boreale*）と書いてあるが、他の業者のリストではキョクチハナシノブ(*P. boreale*)として説明されていて、外見では区別がつかないという質問だった。

インターネットは情報の宝庫である。初めて手に入れた種子を育てる場合など、自生地のロケーションや開花状況までもネット検索で知ることができて、便利なことはこの上もないが、反面、昔のように、ヒマラヤの標高4000m産などといった大雑把な産地情報だけを頼りに、試行錯誤を重ねて育て、苦勞の末に初めて花を見るといった感動は、便利さと引き換えに失われてしまった。

しかも、ネット上の情報は誤りも少なくない、試みに「キョクチハナシノブ」or「極地ハナシノブ」でネット検索すると、何件かのサイトが見つかった。植物分類系や

フィールド系のサイトは、概ね妥当な記述だったが、園芸系のサイトはどれも誤った記述で、それを孫引きして記載するために、誤った情報でも簡単に増殖していくのが読み取れた。

また、あるサイトでは「ヒメハナシノブ (*Polemonium humile=boreale*) この名で流通するものだが出生(出所?)不明」という記述も見つかった。私のところの通販リストを見たうえで部分的に引用し、出生不明と決めつけているのが明白で、正直、少しムツときた。これを書いた人は、自ら文献をしっかりと読む努力をしていない事は一目瞭然だった。

ヒメハナシノブは吉野博吉氏ゆかりの植物である(写真)。吉野さんのためにも誤った情報流布は放置して置けない。質問者はどこの誰とも知れないものの、北大植物園の林忠一氏が開設しているサイトのメーリングリストに加わっていると書いていたので、少しでも多くの人目に止まるように、そこに返信を書き込んだ。できれば長く残せる活字媒体で、多くの人に読んでいただきたいので、少し省略があるが、ここにも原文のまま転載したい。

「結論を先に書きますが、*Polemonium boreale*は、和名ヒメハナシノブで別名なし。これにキョクチハナシノブの名を当てるは誤りです。キョクチハナシノブは、全く別種のハナシノブです。

キョクチハナシノブのラテン名は、戦前の文献では*Polemonium villosum*になっています。現在は*Polemonium acutifloru-*

m Willd. ex Roem. et Schultzまたは*P. caeruleum* Linn. ssp. *campanulatum* Th. Friesで、細かく分類する小種主義のロシアでは、まだ前者とする学者が多いのですが、日本では後者を妥当と考えるのが主流になっています。*P. villosum*も*P. acutiflorum*も*P. caeruleum* ssp. *campanulatum*に含めてしまう大種主義的な考え方です。

キョクチハナシノブは、今は国産種ではないので、市販の書籍には記載されることが少ないのですが、それでも「山溪カラー名鑑・日本の高山植物」(豊国秀夫)のハナシノブ属の最後のところに和名と学名が記述されています。

山草園芸家として高名な某氏のサイトでは、*Polemonium boreale* 別名・極地ハナシノブと、説明してありますが、これは完全な誤りです。園芸雑誌などにも精力的に執筆している人の説明なので、他の業者も、それを孫引きして記載しているものと思います。種小名**boreale**はギリシャ神話のBoreas 北風の神からきています。周極分布植物に多くつけられている種小名です。学名に慣れている故に「boreale=極地」と早とちりをした誤りと推察しますが、この学名と和名がセットになって園芸界に定着すると、困ったことになります。

Polemonium boreale Adamsの和名としては、ヒメハナシノブが妥当で、昭和初期に北千島からヒメハナシノブが記載されたときはラテン名*P. humile*と記載されていました。*P. humile*は*P. hulitenii*のシノニムです。研究者によって見解の相

違があったようですが、現在は*P. hulitenii* (*P. humile*も含む)を*P. boreale*に含める見解が分類の方では大勢です。

ちなみに、キョクチハナシノブとヒメハナシノブは、戦前の日本領だった北千島と樺太に分布していて、「図説・樺太の高山植物」には、キョクチハナシノブは「花冠裂片は鋭頭で濃紫色の細点が散生するので判別できる。中央山脈の北部に産する。」と見分け方も書かれています。

千島・樺太の植物に興味があるのでしたら、参考文献としては、戦前の千島・樺太の調査報告、とくに館脇先生のものから読むのがフロラ全体が理解できて良いのですが、調査報告は発行部数が限られていたので古書でも入手困難です。」

その他の文献は、

*「図説・樺太の高山植物」樺太叢書5・船崎光治郎著・上巻・昭和16年樺太庁発行

*「樺太の植物」菅原繁蔵・昭和12年(1937)菅原繁蔵樺太植物研究後援会発行

*近年復刻の菅原繁蔵「樺太植物誌」国書刊行会(大きな図書館には蔵書がある)

*「北海道の高山植物と山草」伊藤浩司・1981.ガーデンライフ別冊・誠文堂新光社(検索表あり)

*『北海道の植物(2)ハナシノブ』伊藤浩司・「北海道の自然と生物3号」1990.樞書店(検索表あり。Fig多数で、これは必読です)

私がヒメハナシノブを手に入れたのは、たしか1983年だったと思う。とある園芸店に小さく可憐なハナシノブが一鉢だけあって、思わず買ってしまったのだが、店でラベルを取り違えたらしくウメバチソウと書いたラベルが付いていた。売り子の小母さんに訊いてみたが、名前は判らないという。本などで調べたら容易に判るだろうと決め込んで買ってはみたものの、名前が突き止められず、長い間ポレモニュームsp.として育てていた。その後、梅沢さんから吉野さんを紹介され、親しくなってきた吉野さんは頻りに私の圃場に来訪されるようになったが、このハナシノブには真っ先に目をつけて「ヒメハナシノブのようだ」と、ヒントらしきものを与えてくれた。

吉野さんがこのハナシノブを所望したのは勿論だが、そのときは親株一株のみだったので、翌春に株分けができたなら分譲しますと約束したのだが、次の冬に冬囲いの中



ヒメハナシノブ (イラスト 丹 由紀子)

で蒸れによる腐敗で、親株そのものが枯れてしまった。

この初代の個体は、ほぼ不稔性に近く、稀に数粒の種子が採種できても発芽させることができなかった。エゾハナシブなどでは株分け繁殖が容易なのだが、このハナシブは大きな株になっても株分けが難しく、安易に根を分けると、分けた一方の根に成長点が認められないことがあって、植替えのたびに株分けしたい気持ちを抑えたことを憶えている。一度だけ株分けが上手くいって、北海道山草会の秋南氏と、当会の吉本明氏に分譲していたので、まず秋南氏に打診したところ、増えていないとのことだった。

そうなるとうつたハナシブへの未練は却って募った。それから二、三年過ぎて旭川の吉本さんを訪ねポレモニウムsp.の様子を聴いたところ、順調に育て株分けもできているという。厚かましくも出戻りを申し出て、再入手が実現した。

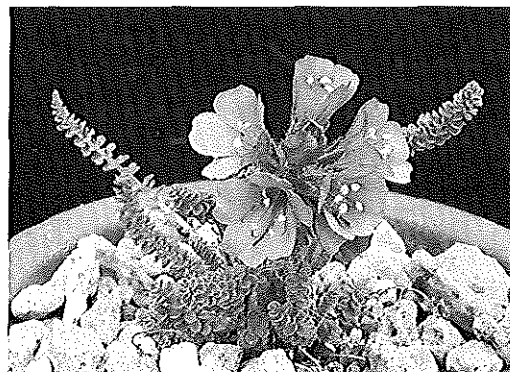
吉野さんと知り合いになったころ、札幌で発行されていた「北国の園芸」に一年間連載のエッセイを書いたことがあって、そ

の編集長の三浦さんの紹介で、吉野さんと同じく北海道山草会の古くからの会員だった土田忠男氏とも知り合いになった。土田さんは、北海道で保存栽培されてきた千島・樺太産植物の導入のルーツや保存に努力した人については、誰よりも詳しく知っている人で、あちこちの文献にそれについて断片的に書いているのを目にしていた。

ヒメハナシブのルーツや保存の経緯についても、土田さんに訊ねるのが早道だったが、この人は植物について話し始めると留めが無くなる性癖の持ち主で、午前中に訪問すると、延々と話が続いて、暗くなるまで開放してもらえない。直接会うのは避けて、電話で用件のみで済まそうと思っても、結局は受話器を持つ手が疲れるまで話し相手にされ、まるで蟻地獄の巣に落ちたアリのような状態に陥ってしまう。梅沢さんなど多くの方が随分アリになった経験があったと聴くが、私もヒメハナシブの再入手が叶ってから、そのルーツについて土田さんから手掛かりを得るために、かなりの時間をアリ状態で耐えて、やっと北海道山草会の古参会員の手で細々と保存されて



吉野氏由来の北千島産ヒメハナシブ



ロッキー北部産の*Polemonium viscosum*

いた植物であったことが聞き出せた。

最終的な保存者は菅原福次郎という人であった。吉野さんは昭和19年(1944)に占守島でヒメハナシノブを含む多くの種子を採集し、北大植物園の舘脇操先生宛てと、北海道山草会の分は親しかった会員の音喜多氏宛てに送ったそうで、当初、その種子はかなり発芽して生育したという。吉野さんと北千島との関わりは、「北方山草」8号「中部千島温禰古丹島植物日誌」に詳しい。

戦後、落ち着いてから、吉野さんは北大植物園を訪ねたが、吉野さん由来の植物は殆ど見られず、小樽の音喜多宅も訪ねたが移転して消息不明で、吉野さん由来の植物についてのその後の消息も、そこで途絶えてしまったという。戦後、吉野さんは家業の生花店に専念し、北海道山草会との繋がりは無かったらしい。

蛇足ながら、吉野さんの昔の店舗は時計台の向かいの丸惣旅館とは反対側の北の角にあって、私が通っていた小学校は時計台の南向かいにあったから、小学生のころの私は、学校の行き帰りに必ずその前を通っていたし、吉野さんの娘さんと私の妹は、小学校から高校まで同じ学校に通っていたのだと、後に吉野さんから教えていただいて、浅からぬ因縁を感じた次第である。

吉野さんと土田さんの話では、戦前の北海道山草会の栽培植物にヒメハナシノブの名前は見つからなかったという。ちなみにポレモニューム・ボレアレが導入され、量産普及し始めたのは、1991年に森和男氏がアラスカ産の個体を導入してから以降のことで、それ以前に残っていたヒメハナシノ

ブの栽培起源は吉野さんの採集種子から始まったと見て間違いはない。

戦中戦後も細々と保存されてきた千島・樺太産の植物が、一般の趣味家にも身近な存在になるのは、山野草の流通市場が形を整え、生産者による量産体制も今に近いものになった昭和40年代後半以降のことだが、カタオカソウのように増殖率が低いものは、今も一般には普及していない。ヒメハナシノブが普及しなかったのも、増殖の困難さが原因になっていたのだろう。

株分けだけの繁殖では、また枯らしてしまう可能性があると考えて、私は戻ってきた株から実生による繁殖を試みたが、株を肥培充実させても、自然のままのオープン・ポリネーターでは以前と同じ結果になった。特定のポリネーターが必要なのかとも考えたが、ハナシノブ属の植物は放任栽培でも種子が得られるのが普通である。それで花の状態を観察してみると、雄蕊はあるものの花粉の出が非常に悪いことに気がついた。わずかに花粉は出ているようなので、早速、人工受粉を繰り返したところ、十数粒の完熟種子が得られた。

その種子から育てた二代目の株には、花粉の出が悪い個体は皆無で、その後は順調に世代交代させることができたし、種子もあり余るほどに採れて量産できるようになった。

長年、株分けなどの栄養繁殖のみを繰り返すと、稔性を失う植物があることは知られているが、ヒメハナシノブの場合には、たまたま最後に残っていたのが稔性の低い個体であったのだと思う。自生地であれば、

他の個体から花粉を得られるので、このような個体でも種子をつけることは可能なわけである。

昔の山草栽培家の中には、いわゆる珍品植物の希少価値を保つために、増えても他人には譲らずに捨ててしまうといった偏狭なコレクター的な人もいたそうだが、今でも一般の趣味の栽培家は増殖には熱心ではない。たくさん殖やすと、それだけ世話も大変になるし、場所も必要になるからである。ましてや戦後の食糧難の時代に山草などを育てていた人たちは少数の稀有な人々で、仲間内に譲る分ならば、あえて実生増殖しなくても株分けだけで足りていたのだと思われる。戦後、千島・樺太産の植物は多くの種類が絶えてしまったが、今も残る植物は稀有な人々の稀有な情熱によって保存されてきたのである。

ヒメハナシノブの実生二代目ができたとき、苗ができたことと、培養保存に努めたのが菅原福次郎という人だったことを吉野さんに伝えたところ、前から心当たりがあったように頷いていた。吉野さんよりも古い世代の人だが、今の白石区菊水で山草園を営んでいた人で、この菅原福次郎氏やカタオカソウなどを保存した中藪光信氏、吉野さんとは親しかった熊坂退治氏などが、戦時中から戦後にかけても、熱心に山草栽培を続けていたのだという。

後日、北方山草会に入会した佐藤昌子さんは、熊坂氏の娘さんと吉野さんに紹介された。熊坂さんの没後は、培養していた植物を佐藤さんが受け継いだそうで、ヒメハナシノブについて佐藤さんに訊ねたとこ

ろ、昔はあったような気がするが、今は無いとのことだった。

私事になるが、菊水で山草園を営んでいた菅原福次郎氏については、思い当たることがあった。高校の山岳部時代に菅原君という気が合う後輩がいて、卒業後も頻りに山行を共にしていたので、何度か彼の家を訪れて山行の打ち合わせをしたことがある。広い敷地に大きな樹木がある家で、庭には柵が作られ、盆栽などを交えて高山植物の鉢植えもたくさん並んでいた。訊くと「祖父がやっている」とのことで、門柱には木製の看板が掲げられていたような記憶もある。

この原稿を書くに当たって、何十年振りか彼に連絡を取ってみたところ「福次郎は祖父です。当時、東光園という看板をあげていました。時々、北大の先生が来ていました。東光園は昭和50年ころ祖父の失火で焼失してしまいました。祖父は昭和55年頃に亡くなりました」と返事がきた。

古くから培養保存されてきた植物についての由来は、それを知っている吉野さんや土田さんのような人々が他界されると、その時点で伝承が途切れてしまうことが多い。晩年の土田さんは、かつて栽培された記録がある千島・樺太産植物の由来などを纏める作業を進行させていたようで、時々、古い記録資料を探しに吉野さん宅を訪れていたというが、未発表で終わってしまったらしい。吉野さんが大切に保存していた数々の古い資料も、今後は散逸してしまうのだろう。

口伝えでは誤って伝えられることも多く、やはり菅原福次郎氏によって戦後まで保存されていたハナタネツケバナ(*Cardamine pratensis*)は、樺太産ハナタネツケバナとして今も生産販売されているが、吉野さんや土田さんの文献を調べると、正しくは千島産であった。由来は活字にして残すことが必要なのだが、やや遅すぎた感もある。吉野さんは「北方山草10号」(1992年)に「千島の植物について」という貴重な一文を残されているのが、それには書かれていない事を、少しだけ補足しておく。

千島産のチシマヒナゲシ、カタオカソウ、樺太特産のシュミットソウ *Astragalus sachalinensis* は、前述の中藪光信氏によって戦後まで保存されたと記録されている。このうちチシマヒナゲシについては「リシリヒナゲシと混同されていて、識別の判断が難しい」と書いてあるが、1990年ごろにはリシリヒナゲシとの交雑して、すでに純系は絶えていた。私のところでは、98年に高橋英樹先生から中千島シムシル島で採取の種子を頂戴したのを機会に、交雑の恐れがあるリシリヒナゲシを処分し、チシマヒナゲシを増殖保存している。

菅原福次郎氏は、ナーセリーの草分けとも言える栽培家だったので、多くの種類を保存していたと思われるが、ヒメハナシノブ、ハナタネツケバナ以外の保存については不明である。

チシマハマカンザシは、北大植物園、北海道山草会、小樽山草会で戦後まで保存。チシマウスユキソウは北大植物園と北海道

山草会が保存。アライトヒナゲシについては、1926年にアライト島で伊藤秀五郎、小森五作氏が採集した種子をルーツに北大植物園で栽培され、栽培で得られた種子が北海道山草会に流れた系統と、北海道山草趣味の会の佐藤吉郎氏が、戦前かなり早い時期に独自に自生地から種子を入手して、それが普及した系統があるとされる。戦時中は北海道山草会と小樽山草会で保存された。

千島産のチャボシコタンソウ *Saxifraga brochialis* ssp. *cherlerioides* (吉野さんは別名のヒメクモマグサで記載)、ムラサキイワベンケイ *Rhodiola caespitosa* f. *humilis* (吉野さんはムラサキベンケイソウと誤記)、ヒメエゾスカシユリ *Lilium dauricum* v. *alpinum*、樺太産のシロバナカラフトミセバヤ、トドシマゲンゲなどの保存者については不明だが、いずれも前述の稀有な情熱で植物を守り育てた人々、吉野さんとは袖擦り合った人々が今に残してくれたものであることに間違いはない。

樺太特産のカラフトピランジは、戦後の混乱期に栽培個体が絶えたように思われていたが、北海道山草会の中原護一という人が、道北の農家の庭で育てられているのを偶然発見し、その株の種子から増殖して普及させたものだと、土田さんは話していた。

こうした記録は、現在の北海道山草会には資料として全く残っていないようで、アリ状態は大変であったが、もっと多くのことを訊いておくべきだったと、今にして思うのである。

(山野草ナーセリー・アルム)